

丑寅勤行について考える

(平成四年一月一日 No.60号「正信会報」に掲載された
ものに大幅加筆)

廣 田 頼 道

丑寅勤行をはじめた理由

一九八六年十月一日より、私は、毎月の一日、七日、十三日、十五日の計四日間だけ、丑寅勤行をすることにしました。

一日の報恩は、現在では、御経日と称して先祖の塔婆供養の為の日のように思われていますが、元旦一日に丑寅勤行をして新年を迎えるように、本因妙の信仰の志に立ち還って報恩の為に行うものだと思われまます。

七日は、開山第二祖日興上人の御報恩。

十三日は、宗祖大聖人の御報恩。

十五日は、第三祖日目上人の御報恩。

昔から、この四日間は、本山大石寺の塔中、満山の出仕出来る住職全てが、丑寅勤行に列席する衆会(しがい)として、現代迄続けられているのであります。

毎日丑寅勤行をすることは、毎日の予定や、精神力、体力を考えれば、それは無理だと思い、せめてもこの四

日間の富士門にとって大切な日だけは、報恩の為に行ないたいと考えたわけであります。

加えて、私は、正信会という一つの組織も、常に大聖人の本因妙の信仰に立ち還ろうとする不断の精進をしない限り、何年かして行く内に、信徒の人数、勢力を中心に考える、覇権主義的な意識、方向に向って行くように思え、今一度、雑事雑念に流れやすい、朝夕の勤行ではなく、法門上大切な、丑寅の刻に勤行をし、どのような信仰の姿勢を大切にして行かなければいけないのか、御本尊様の前に、小さな自分をキチンと置いて、逃げることなく、自分を見つめ直そう、成道の刻に自分を置いて、考え直してみようと思つたのであります。

二つ目に、正しい相承の儀を経ずして、貫主を詐称している阿部日顕師に対して、「丑寅勤行をさぼっている、花見に浮かれて丑寅をしない」とかの色々な批判がされました。それでは、批判している者は、何をしているのかを考えなくてはいけません。

落ちついて考えると、ニセ者の貫主が、さぼり乍ら、逃げ乍らでも、丑寅勤行をしている。ニセの丑寅勤行、自分を本物に見せる為に丑寅勤行をしているのですからこれは大変奇怪なことであります。

昔から、丑寅勤行は、本寺（本山）の勤行だ、貫主の勤行だと、本山の中に閉塞された貫主の個人的勤行のように言われて来ましたが、成道を期する勤行に、本山とか貫主だけのとかいふことが、あろうはずはないわけですから、そういう考えはおかしいのであります。

阿部日顕師を否定するということは、こちらにも信仰の法門を修行の上に体现し、守つていかなければならない責務というものはあるはずだと思つたのであります。

三つ目に、戒旦遙拝の意味を含んで朝夕の勤行をするといつても、実際に丑寅勤行の姿に順じて行い、客殿において師弟一箇し、その客殿の奥に一念三千の法魂ましますことを拝することが大切なわけであります。

時間の関係で正月元旦の丑寅勤行は、十一時四十五分からはじめ、参詣される信徒の方々と正面の勤行の後、東北に向つて遙拝の勤行も行い、改めてその心を刻んでいただくようにしてあります。

セリフだけで遙拝の神経がマヒして行くなれば、それはまずいことだと思ひ、遙拝の勤行まで行うようにしてあるのであります。

丑寅勤行の時刻

丑寅勤行をはじめるにあたって、私自身が小僧として本山にあがった時は、所化は四班に分かれ、小僧は四班の前班と後班の八班に分かれ、小僧は八日に一度、所化は四日に一度、丑寅が廻ってくるという取決めであった。

日達上人が貫主になる以前の、日淳上人、日昇上人の時代は一時からで、日淳上人の時代は、天拝も四座迄、寿量品を入れて勤行で、それでも三時前位に終わっていた。

しかし、御会式等の大法要の時には三時から丑寅勤行を行っていた。通常の丑寅勤行の時は世雄偈はしていなかった。日昇上人以前は、午前二時から勤行が行われていたと、後になって聞かされたが、何んの知識もなく、日達上人の弟子として本山にあがった私達は、はじめから丑寅とは十二時からの勤行という感覚しか持ってなかった。

本当にねむたかった。なぜ丑寅勤行をするのか、丑寅とは何かを教えてくださいませんか。ねむたくて始まり、ねむたくて終る。終れば「おまえ達ねむっていたな」といって、先輩が廻って来て、ピンタをはる。理屈

抜きでねむたく、本当に暗い気持になった。冬は寒さの為に足の芯まで冷えて、終ってから寝ることも困難だった。夏はさすがしく、終ってからそーっとプールで泳いで汗を流すことも出来た。

こんなことを色々と思い出し乍ら、まず、小僧の時にしていたように、丑寅勤行を十二時からはじめてみた。何ヶ月かやっている内に、この十二時という時刻は、どうもおかしいということに気づいた。

丑寅勤行といっているのに、丑寅の時刻ではないのである。子丑の勤行なのである。

明治六年になって、西洋の太陽暦が用いられるようになって、時刻も、十二刻が二十四時間という発想になり、それまでの、人間の生理として、丑寅の丑の刻を一日の終り、寅の刻を一日のはじまりに感じていたものが、合理主義の割切として、夜中の0時を、一日の終りとはじまりに考えるように計られたのであります。

一日の終りと、始まりの考え方を、今風の感覚に置き換え、加えて丑寅を、信徒の参詣の都合、一夜番関係者の次の日の仕事への支障。貫主自身の日程、健康への考慮、等を総合的に考えて、十二時の勤行にしたというのであれば、(丑寅勤行を十二時にする理由を明らかにさ

れた日達上人の論文を、私は不明にして拝したことがない）それはそれで仕方のないことだと思ふけれども、それならば、一日の終りと始まりに跨がるのが重要なことになると思われる。

たとえば十一時半から始まって、一時に終ろうとするとか、いうことがなければ、丑寅勤行の意味がまったく失せたものになってしまうと思う。

日顕師の時代になって、日顕師はさっそく丑寅勤行を二時にしたそうである。教学部長時代から内心忸怩たるものがあつた為に、そうしたのだと思う。（これも何故そうするのか、不明にして論文を見ていないので、何故そうしたのか分らない。これでは、その時代の人間の心の趣くままということになってしまう）

私も、十二時からの丑寅勤行を何ヶ月かした後、やはり十二時からの丑寅は法門的におかしいと思ひ、二時から行うこととした。

しかし、まだ一抹の疑問が残った。

私が行う勤行の内容は、

天拝——方便、自我偈、観念（六分）

正面——十如是、世雄偈、寿量品長行、自我偈（二十五分）
題目（三十分）
観念（五分）

戒旦遙拜——方便、自我偈（五分）
題目（十分）
観念（五分）

合わせて、約一時間半、二時から初めて、三時三十分に終了することになる。

こうして数ヶ月やってみたが、それでは、寅の刻には三十分だけ入りこんだ時刻にしかならないということになる。

一時間間で終れば寅の刻には数分しか、かからないということになってしまう。

丑寅ということとは、東北の方角と、時刻の画面を大切にしなければならぬはずであります。

王舎城と靈鷲山の関係。インド、中国、日本の東北角の位置。京都、比叡山の東北の位置。大石寺と富士山の東北の位置。これらは、大聖人の丑寅成道の法門の上に重ねられる大切なものであります。

丑寅は、東北、三時ということでありませう。この三時を跨ぐことが、まさしく丑寅ということになるわけでありませう。

時刻のみを見た時、丑は一時〜三時。寅は三時〜五時ということになりませう。

つまり三時を中心に一時から五時の間。それも成道と

いう点から、薄墨の寅の刻の時間帯、漆黒の深い凡夫煩惱を表わす丑の刻の時間帯ではなく、寅の時間帯に重きを置いて、丑寅の勤行が考えられていたと思えるのであります。

主題が成道であり乍ら、丑の時間帯に重点を置いて勤行が行われるとすれば、主題不在ということになってしまふのであります。

昔の様に、三時間も四時間も勤行して、夜が白々と明けて来たという、まさしく丑の刻のはじまり一時から始めて寅の刻の終りの五時迄かけられていた時代も、あつたかもしれない。しかし、今日では、だいたい一時間半ほどの勤行が精一杯になってしまつていたのであります。

こうした試行錯誤から、私は、二時四十五分にはじめ四時十五分頃に終る。つまり、丑の刻に十五分、寅の刻に一時間十五分。寅の刻に重きを置いて、朝暁を迎え、勤行を終了するという時間帯をとることにしたわけであります。

二時半からはじめても考え方は同じで、何分かのズレは赦されるにせよ、丑寅の意味を遵守するならば、この時間帯のあたりが、一番丑寅の法門を姿にあてて、かなつ

た時間といえるのではないかと思つたのであります。

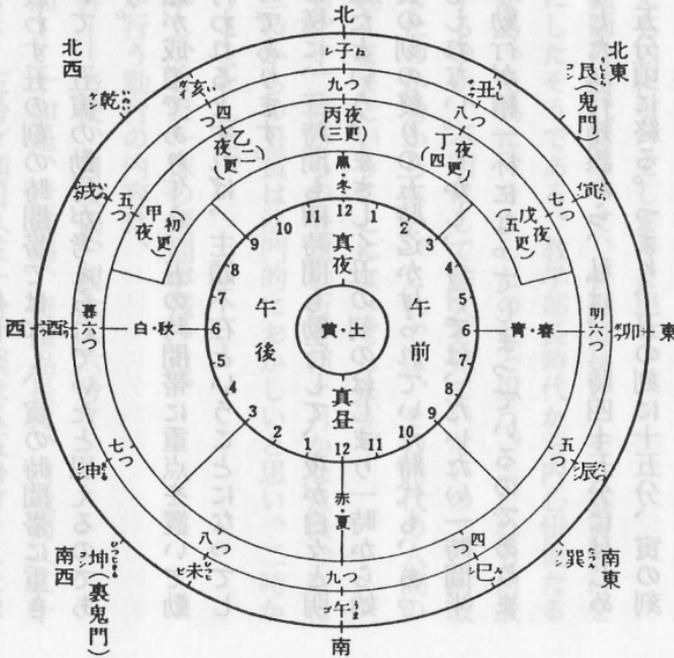
この状態を半年ほど続け乍、丑寅に関する文献を興味を持って求め読んで行きました。大石寺においてこれほど大事なるものと称している丑寅勤行に関するものがどうもはつきりしていなくて、唯一まとめてあるものといえ、昭和四十六年六月二十日発行の「総本山大石寺諸堂建立と丑寅勤行について」(二八頁)という日達上人がまとめられたものであります。この中にあげられた二十三世日啓上人の元禄元年の『留守定』という文書に、

一、一夜番者如_レ常丑_下刻_{ナリ}常番_表相定_{メテ}可_レ勤也、
若_レ於_二常番出表_一早者_ハ五日、遅者_ハ六日之過番、代
管中居之為役急度可_二申_レ被_レ付事。

この様に示され、丑の下刻に丑寅勤行を常の如く常番(昔の時計)を確認の上はじめよと示されているのであります。

しかし、江戸時代は、実質的な生活に時間をスライドさせる為に「不定時法」というものが、幕府によって定められ、角川新版古語辞典(一三八七頁より)(図参照)夏至、春分、秋分、冬至によって、生活時間がずらされ平安時代の季節によらない定時法にもどることはなかつ

方位・時刻表



たのであります。これによれば、夏至と冬至では随分ず
れのあるものとなって、丑寅動行においても、はじまる
時間、終る時間に大きなずれが生じることになるわけで
あります。

江戸時代の不定時法



二時に丑寅動行をはじめるといことは、艮(丑寅)
は三時ですから、一時間半の動行をするとすれば、一時
間は丑の刻、三十分は寅の刻ということになる。日昇上
人より以前、又、日淳上人の時代においても御会式等の

時には三時から丑寅動行
をしていたといことは、
正式を三時として、ずら
していたということにな
るが、三時といことは、
丑寅動行ではなくて、い
きなり寅動行ということ
になってしまふ。
私が時刻表の刻の見方
を、長期間にわたって丑
の刻を一時からではなく、
二時からと見まちがいを
していた時期は、丑寅の
動行を先の日啓上人の時
代の時刻明記の文書から
して、三時二十分と大ボ
カの判断してやっていた

が、その間違いに気付いて、丑の下刻（丑三ツ時）二時二十分より、

天拝——方便、自我偈、観念（六分）

正面——十如是、世雄偈、寿量品長行、自我偈（二十

五分）題目（四十分）観念（五分）

戒旦遙拜——方便、自我偈（五分）題目（十分）観念

（五分）

合わせて約一時間四十分、二時二十分からはじめて、四時に終了し、三時の丑寅の刻を丁度、正面の題目を唱え乍、丑寅の刻を送ることが出来る様になったのであります。

そうして考えると、昔の丑寅勤行は、もちろんもつと時間が長かったと思いますが、この丑の下刻二時二十分からの時間にしても方角を表わす意味においても、江戸時代の「不定時法」ではなく、大聖人日興上人当時の季節に左右しない定時法で行なわれていたであろうと思うのであります。ふりかえって、私達が小僧の時代、十二時にはじまって、一時ぐらいで終って、それで一夜番も終って帰ってしまう、御宝蔵の警備巡回もその時で終りでこれでは一夜番にはならないということになります。一夜番ということであるならば、当然夜通しということ

とであり、丑寅の勤行が終り、昼間の修行する人達の朝の勤行の者が起床して来て、自然に引き継ぎがされていつてこそ、御宝蔵の警備ということになるわけであります。十二時からの丑寅勤行は自分達の都合だけを考えた長いまちがいだったと思います。三時からの丑寅勤行も寅勤行であって、どういう意味を持っていたのか伝わるものがあります。二時からの丑寅勤行も、丑の方に重きをおいて、寅の時には遙拝勤行六壺勤行の時となっていて師弟一ヶの客殿正面の勤行にふさわしくなく時間的に早すぎると思います。

やはり、日啓上人時代の記録にある、

一夜番は、常の如く、丑の下刻なり常番の表を相定めて勤める可きなり

の御文にかなう、二時二十分から勤行をすることが、時刻、方角、丑寅にまたがり、かつ寅の成道の暁に重きを置いてまたがる時間の配分になうものと思うのであります。

最蓮房御返事（全集一三四〇頁）の示唆するもの

大聖人様が佐土へ、文永八年に流罪されてより、どの様な経過で、最蓮房が大聖人に親近したのかは、詳か

はありませんが、文永九年四月十三日付の御書は、法門的な大切さも、さること乍ら、佐土という島の中で、再三合うことの出来る者同士が、流罪人の立場を越えて、師弟の交わりをしている手紙として、重視しなければならぬものであります。

同抄（一三四〇頁）には、御状に云く、去る二月の始より御弟子となり帰伏仕り候上は、自今以後は人数ならず候とも御弟子の一分と思し食され候はば恐悦に相存ず可く候云々
最蓮房の手紙の内容を大聖人が自らの手紙に右のように再録し、

文永九年の二月の始には、御弟子の扱いをしていることが分かる。そして、自分のような者を、弟子の一分に加えていただき、とても嬉しい、と述べているわけである。しかし、同抄（一三四二頁）には、大聖人の言葉として、

何となくとも貴辺に去る二月の此より大事の法門を教え奉りぬ、結句は卯月八日夜半寅の時に妙法の本円戒を以て受職灌頂せしめ奉る者なり

と、示され、二月からの弟子としての扱いと別箇に、今日でいう授戒の儀式（得道の儀式か？）を、わざわざ

仏生日の四月八日、塚原三昧堂より四月三日に身柄を移され、五日目の道不案内の夜中に、受職灌頂せしめる。

この寅の刻とは、儀式法要の終了時刻で、これは今日でいう所の丑寅の刻の勤行であろうと思われるのであります。

丑寅勤行は、諸々の団体異名の法門的事柄が融合する大切な時刻と勤行であるということが断ぜられるのであります。

広宣流布イコール一切衆成仏の祈念。血脈受持の体現。薄墨成道の体現。客殿（師弟一箇の奥深き（己身）所の戒壇遙拝の勤行。（その証左として、衣免許、袈裟免許が、血脈法水、師弟一箇の体現として、この丑寅勤行の際に行なわれること）御会式、御虫払等の重要な法要の式次第のすべてのはじまりが丑寅勤行であること。

これらの点から見て、丑寅勤行は、富士法門を表わす、化儀即法体の根幹をなす、最たるものであるといわなければならぬ。

最蓮房と、大聖人の相対する姿を、目の辺りにしていた、日興上人が、大聖人の滅後、身延期のことは不明ですが、大石寺開基後、毎日の丑寅の刻に勤行を施行するようになったということは、信仰上の自然な姿と思える

のであります。そして、大聖人と最蓮房との間に示されたことは、特例ではなく、幾度も行なわれていたと考えるのであります。

私達もそうであったように、衣、袈裟、免許を丑寅勤行の折に行つて来たということも、師弟一箇（大聖人から、袈裟、衣を預かる）丑寅成道、境智冥合の団体異名の意義あつてのことと考えるのであります。

丑寅勤行は、大石寺並に貫主の占有物ではない

これほど大切な法門内容が、本山や、貫首だけの、固有の行儀、所有物のように思われたり、丑寅という法門の方角、時刻という意味内容が大切なのであつて、地方末寺にある我々個々がわざわざする必要もないことだと一笑のもとに、伏されるような、軽々しいチリのようなものではないはずであります。

「総本山大石寺諸堂建立と丑寅勤行について」（三四頁）で日達上人は、今から二百三十年位前になりますが、第三十一世日因上人の御筆、延享二年（西暦一七四五年）六月二十八日の『富士記』（研究書⑩六十頁）に、堅固守此、掟今世二代四百五十余歳、間大坊貫主一人、毎朝丑寅、刻勤行也。」と、はっきり丑寅勤行という言葉

がでております。日因上人が法主になられたのは元文五年（西暦一七四〇年）ですから、大聖人滅後ちょうど四百五十九年になります。だから、ここに「三十一代」と自分のことをいっておられるのです。「四百五十余歳」即ち大聖人滅後、大坊の貫首はまちがひなく丑寅勤行を続けてきているわけです。

「十二坊百人、大衆、交代、毎朝出仕、所謂御本番一人、御堂客殿仏前、御華、散、御手伝一人、御堂番、助番一人、御香水、奉、一夜番一人、貝鐘、鳴、勤行、始……。」

（十二ヶ坊の住職並びにそこに在勤している弟子・小僧等は、かわりかわりに交代で丑寅勤行に出仕している。また、御助番とか御本番は勤行の始まる前に華香水をあげたり、ホラ貝を吹いたり、半鐘を叩くという事です。）
「御茶番一人、御湯、進、上人、御宝蔵番一人、廻、寺中内外……。」

（即ちこれは一夜番御宝蔵番のことです。）

「如是行事大聖人開山己来、無、令、断絶也。」と、このようにはっきり書いてあります。丑寅勤行は大聖人、そして日興上人が富士へお移りになってからずっと続けられているのです。この様に文章をあげ解説をされています。

ここには

「大坊貫主一人、毎朝丑寅、刻々勤行也。」

と示され、あたかも貫主の個人的な占有の勤行であるかの様におもわれるのでありますが。

しかしここに示される全体の執行される内容を見た時、貫主が導師であることは当然のことで、それをささえる内容は、この丑寅の勤行の意味、行いを継続せしめることに全山が一致して行っているという事実であります。この為の中心者である為に「本番」と名付け、その見習いにと「本番」に一朝事起きれば「助番」がその任をまっとうするという役廻りであり、丑寅に関わる、全山の内容は大法要以上のものであります。一切衆生成道を形に表わし、行われる丑寅の勤行は、時の貫主を導師として行ない、森羅万象に妙法を伝え、師弟一箇、広宣伝流布の姿を己心に表わす勤行が、弟子分無しの師分だけで行なわれる貫主占有物でないことは法門の上からも明白であります。

付記

私達が小僧として本山に在勤していた時代は、御華水の水取は、丑寅が終ってから行く状態でありました。又

はもつと遅い人もいました。五時半からの朝の勤行をしている最中に御水あげにいらっしやるという状態でありました。たしかに夜中に起きて水を汲むことは大変なことだと思いますが、この『富士記』の記述に示される様な、丑寅勤行のはじまる前に御水が供えられることなど皆無でありました。

常識からいっても、丑寅勤行の前に御宝前に華香水が供えられる事があるべき姿であると思えます。この点も、改めなければならぬ永年の悪弊でありましょう。

丑寅勤行のススメ

正信会僧侶たるもの、せめて、大聖人の御命日の十三日ぐらゐは、信仰のみに住する日として、丑寅勤行をし、大聖人の信仰を深く心懸け、一人一人が虚心坦懐に自分の信仰の姿勢を振り返って、本因妙の信仰に立ち、精進することが大切であらうと、私は思います。

又、貫主を詐称する日顕師が、丑寅勤行をさぼっている、さぼっているときけんでも、そんなことは意味のないことであると思う。泥棒に泥棒といっても、彼は憎しみをいだいて逃げるだけで、より一層泡をふかしてやろうと、泥棒に精励するだけなのであります。

それよりも何よりも、まともな、富士門信仰者たり得ようとする者自身が、どのように法門を守り、精進して行くかが、重要な問題だと思ふ。たとえささやかでも、丑寅をサボつて、けしからんという人間こそが、丑寅の意味を踏まえ、意義を守り、化儀振舞いを守つて、後世に伝えて行くことが出来るのではないだろうか。

批難の為の批難だけで終る批難は、醜いだけで何も道とするものがないのではないだろうか。

信仰の菩提心と、それを表わす仏道修行の姿勢によつて他に正法の縁を持たしめ、戒心を持たせ、謗法に気付かせ、導き、成道の道を歩むことの大切さを伝えることが、私達の一番しなければならぬことではないだろうか、口だけで信者を統率する監督の様に督促し、身も意も置き去りにされている、名のみを指導教師、手継ぎの師匠で、正法が弘通されるはずは無いと思ふ。

御書を拝する時、折伏弘教は元來、僧侶が率先垂範で行なうべきもので、それを見習い、助けるのが、檀信徒であつたはずであります。

僧侶が岩將軍であることの恥を自覚した時に、本来の仏道にたちかえる光明が見出せるのではないだろうか。